

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その5—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

秋元 佐恵・阪田 卓洋・須田 智之
多尾奈央子・高橋 深美・八宮 孝夫
山田 忠弘

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その5—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

秋元 佐恵・阪田 卓洋・須田 智之
多尾奈央子・高橋 深美・八宮 孝夫
山田 忠弘

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第 3 期の最終年度（5 年目）である。研究開発課題は「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」となっており、その研究の柱の一つが「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」である。

この第 3 期に入り、本校生徒による日本国内外における研修や、英語での研究発表の機会が増えてきている。今年度も、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）、他校 SSH プログラムによる海外派遣（アメリカ・中国）、Thailand International Science Fair 2017（タイ）等のプログラムが実施されている。

このため英語科では、普通の授業はもとより、外部講師など（SSH Workshop・English Room）も活用して、生徒のプレゼン能力向上に努めている。

1. はじめに

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では、中高 6 ヶ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6 年間で基礎期 [中 1・中 2]・実践期 [中 3、高 1]・発展期 [高 2・高 3] という 3 段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導を行っている。

各学年の授業は以下のとおりである：

中学 「英語」 4 時間（LL・TT 各 1 時間を含む）

高 1 「コミュニケーション英語 I」 3 時間+

「英語表現 I」 2 時間（TT1+LL1）

高 2 「コミュニケーション英語 II」 4 時間

（TT 1 時間を含む）

高 3 「コミュニケーション英語 III」 3 時間（選択）

「英語表現 II」 2 時間（選択）

高校英語は教育課程の変更期であるが、本校は「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を既に行っており、新学習指導要領の実施に伴った大きな変更は行っていない。

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自

由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」である。また、SSH 研究開発課題として「グローバルサイエンティストの育成」が掲げられ、そのための手段として「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が標榜されている。本資料では、今年度の英語科の取り組み、そして国際交流について述べる。

2. 各学年における取り組み

2.1 中学 1 年生（70 期）担当：須田智之

2.1.1 はじめに（基礎期のスタート）

筆者は 70 期生の担任団を務めている。中学 1 年生の英語授業を担当するのは、現高校 2 年生（66 期）に引き続いて 2 サイクル目となるが、過去の経験と反省を生かし授業を展開しようと心掛けている。

最近の中学 1 年生の生徒達は小学校での英語活動を経験しており、入学後間もなくすると学校外でも自主的に英語学習に取り組む生徒も多い。4 月に実施したアンケートでも小学校での英語は苦手であったという

生徒もいれば、英検 4 級～準 1 級（帰国生も含む）を既に取得している生徒が 20 名程いるなど、様々なレベルの生徒がいることが分かった。英語への興味関心が高い生徒や自主的な学習に取り組む生徒が多い現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考えて、実際の授業を組み立てている。

2.1.2 授業での取り組み

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成されるが、筆者の担当は(1)「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2 時間と(2)「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」の 1 時間である。最後の(3)「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」1 時間に関しては本校の多尾教諭に後述して頂く。以下に授業の概要を述べる。

(1) 教科書中心の授業（週 2 時間）

New Crown English Series 1（三省堂）を使用し、英語での生徒とのやり取りや音読を大切に授業を心掛けるようにしている。また、音声面の強化と **Warming-up**、更には文法事項の導入を兼ねて、英語の歌を多数紹介している。

(2) ティームティーチングの授業（週 1 時間）

ALT と共に行う授業で、教科書ではカバーできない日常的な単語を多く取り上げて語彙力増強を図りつつ、*Talk and Talk 1*（正進社）を使用して文法事項の導入、更には校外学習、夏休みの出来事、体育祭、文化祭など、その時々为学校行事など、生徒達が実際に体験した出来事を取り上げて言語化することにより、英語での理解・表現の定着を試みている。

2.1.3 その他、授業外での取り組み

(1) パフォーマンス・テスト

学期ごとのパフォーマンス・テストとして、スピーチを行っている。1 学期には ALT/JT との個人面接形式での「自己紹介」を、2 学期は筑駒での学校生活授業や先生方について、あるいは校舎内の様々な場所についてグループで紹介する“*School Life in Tsukukoma*”を実施する予定である。

(2) 副教材など

英語力を定着させるためには週 4 時間の英語の授業

（＝総計 200 分）だけでは足りないのは明らかである。生徒には NHK ラジオ講座『基礎英語 1』（物足りない生徒には『基礎英語 2』または『基礎英語 3』）などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材としては『新中学問題集 英語 発展編 1 Second Edition』（教育開発出版）と『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』（Cambridge University Press）を使用している。

(3) 多読

図書スペースの約 200 冊の多読用英語書籍を活用した多読指導を夏休みより開始した。本校の加藤司書より、これまでに比べて貸出率が急増したとの報告を受けた。また、冬休みからはデジタル書籍の活用などを含めて、英語多読を更に奨励していく予定である。



図書スペースにて：英語多読の様子

2.1.4 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくかが今後の課題である。

2.1.5 LL 教室での授業 担当：多尾奈央子

中学 1 年生の学習科目「英語」の週 4 時間のうち、1 時間を視聴覚機材が常設されている LL 教室で行い、ESL 入門期用の教科書 *Listen First*（Oxford University Press）を使用して聞いて理解することを中心とした授業を行っている。

小学校での外国語活動から英語の音声には慣れているものの、聞こえた語から発話内容をかいつまんで理解することにとどまり、正確にはどのような語が使用されているか、綴りがなんとなく音をローマ字表記し

たものになってしまうことが多い。聞いた英語を正確に理解し、自分で書き起こすことができることを目標としている。

使用教科書は、簡潔な英語での指示文と聞き取りの中心となる語彙が英語で表記されるほかはイラストのみが示されている。音声は英語の自然な速度や口語表現が入門期学習者用に過度にコントロールされずに用いられていることから、聞いて学習したことを使って自分でも発話・応答できるように指導したいと授業を計画している。

授業の流れは以下の通り。

- ① 前時の復習（異なるイラストや設問で）
- ② 新出語、表現の導入
- ③ 聴解問題やディクテーション
- ④ 発話練習
- ⑤ ペアで学習した表現や会話の実践（課題提示）

上記⑤のペア学習は2学期より開始。LL教室のシステムを利用してランダムに組み、練習させている。ヘッドフォンから流れる音声だけが頼りの会話練習となるため、英語らしい音声でclearに発音しないと相手に伝わりにくいことから意識的な発音に努め、聞き取れない場合も聞き返しを自然に行い、その練習にもなっているようだ。

2.2 中学2年生(69期) 担当：多尾奈央子

2.2.1 はじめに（基礎期の2年目）

昨年度より同学年を担当している。入学当初にとったアンケートから、小学校での外国語活動の経験から外国人教師との授業での会話やペア活動、さらには発表活動にさほど抵抗感がなく、積極的に自己を外国語で表現する態度は養われていると感じる。

その反面、その場の状況やジェスチャーなど文字を介さずにある程度の活動内容、発話内容が感覚的に理解できることから、指示を聞き流したり、聞こえた単語からかいつまんで自分なりに解釈したり、と良くない「癖」が身につけてしまっていることも実感している。「何となく理解」できれば、「何となく伝えること」ができればよいという学習ではなく、外国語（英語）を教科科目として「勉強する」という心構えと姿勢を身に付けさせることを昨年は重要な指導項目とし、今年度はそれを継続しつつ、中2生時に習得すべき学習項目を着実に運用することができるような指導計画の立案に努めている。

1年間の授業を始めるにあたって、生徒には中2での到達目標として、以下の5点を示した。

● 「話すこと/Speaking」について

- ①学習した型や語句を使って会話することができる。
- ②テーマに従い、簡単なプレゼンができる。
- ③聞き手を意識したプレゼン準備ができる。

● 「書くこと/Writing」について

- ①学習した型や語句を使って正しく書くことができる。
- ②伝えたい内容に合う型や語句を選択使用できる。

● 「聞くこと/Listening」について

- ①必要な情報を聞き取ることができる。
- ②身近な題材についての発言やスピーチ、ニュースを聞いて大まかな情報を聞き取ることができる。

● 「読むこと/Reading」について

- ①文章の長さに関わらず要点や概要を掴むことができる。

● 「辞書」について *紙の辞書

- ①意味を調べる以外にも様々に活用することができる。
- ②発音記号を見て新たに遭遇した語でも発音できる。
- ③文脈に合う語の意味や語法を見つけることができる。

2.2.2 授業の構成

英語の授業は週4時間あり、そのうち2時間を教科書中心の授業（＝英語の基本的な構造から「型」や論理、および最終的には内容を産出するに必要な語彙を学ぶ時間）、1時間をLLでの授業（＝聴解力を養う時間）、1時間をTT授業（＝他の3時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間）と位置付け、指導を行っている。

いずれの授業でも、生徒にとって身近な場面や文の型で繰り返したくさんの発話練習をすることでコミュニケーションに必要不可欠な「語彙」と「型（語順）」を身につけられるように教材作成に留意している。

2.2.3 教材

・ 2時間の授業

三省堂 *New Crown English series II*
数研出版 『5-STAGE 英文法完成 BOOK 2』
自主教材（プリント）

・ LL 授業

Oxford University Press : *Basic Tactics For Listening*

・ TT 授業

正進社 『Talk and Talk』

Pearson Education (Longman) : Side by

Side

自主教材（プリント）

その他、NHK語学番組の『基礎英語 2』聴取の継続を推奨している。

長期休業中は課題として reader 書籍を与えるが、この夏の課題には Edgar Allan Poe の “Seven Stories of Mystery and Horror” (Macmillan Readers) を課した。課題に対する評価は、内容に関する小テストと音読テストを行った。

2.2.4 教科書の題材中心の授業と TT

教科としての共通認識である「文法等の先取り学習はしない」を踏まえ、教科書で扱われている文法項目に沿った教材を毎回プリントにまとめて授業資料兼ノートとして使用している。教科書に掲載の文法事項や英文は基礎基本なので、必ず発展的なものを教科書以外のテキストや新聞なども含めて様々な英文に触れられるように努めている。

教科書ベースの授業では以下が授業構成の基本型。

- 1) small talk でウォーミングアップ
- 2) その日に取り上げる文法事項を使った活動
- 3) 教科書本文（一部改作）の確認
- 4) その日の学習事項を基に「書く」活動

TT 授業では、該当する文章の型の状況に遭遇した場合に発話・応答できるよう既習の文法項目を反復練習し、応用して自分自身のことについて述べるスキット作りと発表活動を行っている。人前で発表することに慣れ、聴衆に伝わるような発表能力を積み上げるために、毎回より多くの生徒が発表できる場を設け、評価の対象としている。発表時には生徒に互いに encourage させることで、プレゼンの成否は話し手だけでなく、聞き手の姿勢も大事であることを理解させるべく努めている。発表の際の指導ポイントは、Speak slowly, loudly and clearly. および Eye Contact である。その他、posture, gesture の効果的な使い方、またはその逆も実践の中で指導している。

2.2.5 LL 教室での授業 担当：阪田卓洋

Basic Tactics for Listening (Oxford University Press) を使用し、日常会話を中心としたリスニング活動を行っている。授業の流れを以下に説明する。

- ① 洋楽の聞き取り（穴埋め）
- ② 前時の復習（視覚資料を用いて新出表現の復習）
- ③ トピックの導入
- ④ テキストの問題演習

⑤ Dictation

⑥ 新出表現の復習

洋楽は特に文法等は気にせずに、中学生が楽しんで聴くと思われる曲を選んだ。穴埋めの箇所は、既習の単語に絞った。特に、前後の音が連鎖して聞き取りづらくなる箇所を集中して選び、「知っている単語が聞こえない」状態（雑音）から、「言われてみればそう聞こえる」状態（気づき）に導き、「もうその英語にしか聞こえない」状態（定着）まで高められるよう意識した。

次に、前時の復習を必ず行った。1 単位の授業であるため、繰り返しの復習が重要になる。授業の導入で使用したパワーポイントをそのまま使用し、新出表現の確認をした。1 週間経て復習すると、単語を忘れてしまっている生徒も多いが、このタイミングで復習をし、さらに 1 週間後にもう一度同じスライドで復習すると、前回よりも確実に定着している。本校の生徒にとっては 2 回の復習でも十分効果がありそうである。

前時の復習に続けて本時のトピックをスライドで導入する。トピックに関連する視覚資料や映像資料を紹介しながら、生徒のレディネスを高めていく。Clothes の単元では、日本語との相違点に注目しながら身近な服の名称を確認した。blouse など男子生徒にとっては馴染みのない単語がある場合には、Google 画像検索、英英辞典の定義などを随時示しながら理解を促した。LL 教室では、インターネットの情報を即座に生徒に示すことができるため、生徒の質問や授業の進度に応じて適切な教材を与えることができる。Prices の単元では、月の土地（1 エーカー）はいくらか、という質問をし、その場で Google 検索をして、値段を示した。リアルタイムで検索すると生徒の食いつきもよい。

その後はテキストの問題演習に入る。問題の難易度に応じて、1 度聞いて解く問題、2 度聞いて解く問題、スクリプトを見ながら解いてよい問題、の 3 つに分けて、その都度指示した。事前に単語等は導入するが、文法を本格的に説明してしまつては、英語を聞く時間が削られ、本末転倒になってしまう。あくまでも概要理解ができるのに必要最低限度の情報提供にとどめ、説明をしすぎないように心掛けた。それでも問題として難しすぎると判断した場合は、スクリーンにスクリプトを表示し、それを見るか見ないかは生徒の判断に任せた。スクリプトを見ながら問題を解く生徒もいれば、音声だけを頼りに解こうとする生徒もいた。

問題演習は全部で 20 分前後のため、その後はテキストの一部の英文を用いて Dictation を行った。書きとらせるのは新出表現の箇所、音として認識できる

ようになった単語のスペリングを意識させるように心掛けた。その後、まとめとして新出表現の復習ワークシートを配布し（テキスト付属）、定着を図った。

2.2.6 評価

評価材料の主なものは以下の通りである。

- ①期末考査
- ②小テスト
- ③課題（復習のための問題集と自作プリント）
- ④TTでの発表活動

評価ポイントが多岐に渡り、生徒が各自自分でできている点ともしっかり力を入れたほうがよい点について把握しづらいことから、昨年に行ったことで、いかなる学習活動でも机間指導により、都度個別に評価する方法の工夫に継続して努めている。時間的にも授業時間を多く割かず、個別の学習内容について確認および評価、助言などの段取りを案出し実行することは難しいものだが、生徒の学習状況を把握し、学習行動を改善させるにはよい方法を実践できたと思う。同じことが毎回の授業でできるわけではないが、一定の型で継続したことで、生徒自身もいつ、何を評価されるのかを事前に察することができるようになり、毎回の授業や課題への取り組みが主体的になったと思う。

2.3 中学3年生（68期）担当：山田 忠弘

2.3.1 はじめに

今年度の中3（週4時間）は、教科書を主に扱う2時間、ALTとのteam teachingの1時間、LL教室での授業が1時間となっている。

2.3.2 教科書を用いた授業（2時間）

本校英語科の共通理解「（文法事項などの）先取り学習はしない」に基づき、教科書New Crownを1・2学期で終え、3学期はMacmillan Readersの“The Merchant of Venice”を読む予定である。（夏休みの宿題としてPearsonの“The Ring”を読ませ、2学期始めに確認テストを行った）

従って、教科書の7レッスンを1・2学期で半分ずつ進めることになり、1回の授業で扱う教科書本文は1～2ページと決して多くない。しかし、教科書で扱う文法は基本中の基本しか挙げられていないため、自作のハンドアウトを用いて毎回補足することで50分

の授業に足る内容としている。

オーソドックスな授業の流れは以下の通りである。

1. 教科書 new words（CDに続いて音読）
2. 教科書本文 chorus reading（CDを聞き、山田が1文ずつ読むのに続けてrepeat）
3. 注意すべき発音、単語・文法などの補足説明（ここでハンドアウト（4～6に使う）配布）
4. 教科書にない文法補足事項の説明（例文の説明）
5. 和文英訳演習（例文に即したもの）
6. 追加問題

6は別のテキストなどからの10分程度で終わるようなreadingやlistening問題（必ずしもその日の文法事項に即したものではないこともある）の改作を入れている。教科書に関連した追加教材としては、1学期には“Sadako”（Eleanor Coerr）、2学期には“I Won't Get Up! – The Story of Rosa Parks –”（Eloise Greenfield）を使用した。

さらに、2学期は英作文の練習として、漫画（クレヨンしんちゃん）の1話（3ページ）を100語程度の英語にまとめる練習（授業内課題として提出させ、採点・添削をして返却）を2回行った。

また昨年度から引き続き、単語や基本構文の定着を図るための小テスト（単語と和文英訳）を原則週1回行っている。

2.3.3 TT授業（1時間）

この授業で心がけているのは、「クラス41名全員がALT（またはクラス）に対して毎回発話する」ということである。時間にすると1人1分もないが、教室にALTがいる意義として重要なことと言える。1学期に行ったことは次の2つである。

1. 直近に教科書で学習した文法事項（例えば現在完了や関係代名詞）に関するペアワーク（“SIDE by SIDE”から抜粋して作ったハンドアウトを使用）
 2. 1人1分スピーチ（テーマはその都度指定）+ALT（または山田）からの質問に答える
- 2については、事前に用紙を渡して原稿を作らせた。学期末には同じ形式でのスピーチテストとして評点に参入した。

2学期は、「意見の発表とそれに対する反論」をテーマに、簡単な形でのディベート練習を始めた。生徒にとって身近なresolution、例えば、“We should (not) clean our classroom everyday.” “Students who are late for school should (not) be punished.” についての supporting reason とそれに

対する refutation をとっさに考えることで、いわゆる「瞬発力」を養う機会としている。

2.3.4 LL 授業（1時間）

LL 教室で行われるこの授業の利点として、音声を生徒個人のヘッドセットから流すことができること、スクリプトや解答などを生徒モニターにすぐ提示できることなどが挙げられる。

この授業では、時間の半分でテキスト (*Basic / Developing Tactics for Listening*) の1レッスン分を進め、残りの半分は自作のハンドアウトを用い、リスニング補充問題や、洋楽の聞き取り（歌詞の数か所の空所を埋めさせる）、映画鑑賞（英語字幕つき）などを適宜行っている。

【参考文献】

1. 『究極の英語リスニング Vol.1』(2008) アルク。
2. 『究極の英語リスニング Vol.2』(2008) アルク。
3. 『究極の英語リーディング Vol.1』(2014) アルク。
4. “Sadako” (Eleanor Coerr) (1993) Puffin Books
5. “I Won’t Get Up! – The Story of Rosa Parks –” (Eloise Greenfield) (1985) 山口書店。
6. *SIDE by SIDE (third edition) Book2-4* (Pearson Longman)
7. *Basic / Developing Tactics for Listening* (Oxford University Press)

2.4 高校1年生 (67期) コミュニケーション英語 I 担当：秋元佐恵

2.4.1 はじめに

6年間のシラバスの中で「実践期」2年目にあたる高校1年では、続く発展期に高度な英語表現ができるよう、基礎体力をつける必要がある。よって年度当初、3つのことを指導目標とした。

- ① 発表能力の基盤となる言語構造（文法・語彙）を、なるべく自然な形で身につけさせる。
- ② 世界に目を向けた題材に数多く接することで問題意識をもたせる。
- ③ 自分の考えを述べる訓練をする。

①について。中学の段階である程度、文法習得は終わっているはずだが、仮定法や比較表現、準動詞や時制などは、何度繰り返してもやりすぎることはない。単

なるドリル練習ではなく、実際の文脈の中で使用法を理解しながら、積極的に使う訓練をしたい。

②は今のところ教科書中心であるが、たとえば教育や環境などのトピックでは、海外のドキュメンタリーや各団体のHP、TEDなど、アクチュアルな問題と繋げて提示したい。

③は、単元の最後には何らかの形で、学んだことをアウトプットさせている。

ここでは①と③に特化した取り組みを紹介する。

2.4.2 授業での取り組み

2.4.2.1 日英暗誦シート（目標①）

授業では教科書の題材を導入に用いながら、英字新聞、ニュース、インタビュー、小説などを適宜扱っている。その際行っているのが、「日英暗誦シート」を用いたタスクである。これは、生徒が前回までに読んだ文章から、身につけてほしい文を10～15個ピックアップして、B5用紙に日英対照で載せたものである。ただし作る際に少々加工する。たとえば、ターゲット文法を用いて書き換える、単語を類義語に変える、より言いやすいリズムにする、などである。チャンクの切れ目も見やすいように視覚的な工夫をする。なお語彙に関しては、active vocabulary と passive vocabulary をかなり明確に意識して作っている。ここに出す単語は、activeなものとして、自分で使えるようになってほしいものを選んでいく。

生徒はこれを個人やペアでゲーム感覚で覚えていく。さらに覚えた後、時間があれば英文を別の英語で言い換えるパラフレーズ練習も加える。よってこのシートは、前回の内容の復習というよりは、アウトプットへの橋渡し(Intake)としての位置づけである。

たとえば、夏の課題で *The Body* (Penguin Books) を読ませた後、仮定法の文章が多く使われていたため、本文からピックアップしてリズムの良いように加工した。実際には日本語を左、英語を右に書いている。

- ① 僕が君のお父さんだったらいいのと思う。
 - ② 僕が真実を話したところで、誰が信じてくれる？
 - ③ 彼らはまるで僕が存在しないかのようにふるまった。
- ① I wish I were your dad.
 - ② If I told the truth, who would believe me?
 - ③ They acted as if I didn't exist.

これを暗誦させたあと、小テストを実施する。このタスクは英語が得意な生徒も苦手な生徒も、ゲーム感覚で楽しんでやっており、その後の定着率も良いように思う。今後も続けていきたい。

なお、詳しい練習法については、『英語教育増刊号(2016年10月号)』、pp. 18-19「英語教師が身につけたいパラフレーズの磨き方」参照。

2.4.2.2 プロダクション活動(目標③)

レッスンの内容によって、プレゼン、エッセイ、スピーチなどを各単元のまとめとして実施している。

たとえば Lesson 4 Forests for the Future で環境問題を扱った時には、4人チームで環境問題のプレゼンを行った。授業時に各自PCを使って、英語HPの読み方(必要な情報の skimming)を指導した。それをもとに、興味ある環境問題の1つを調べ、問題点や各国の取り組みを発表させた。スライドの枚数を1人1枚、各班7分以内、と限定。(スライド枚数は制限しないほうがよかった)。活動の後、各自の原稿を集め、プレゼン内容とともに評価した。

Lesson 6 El Sistema については、素晴らしいドキュメンタリー映画 El Sistema (スペイン語版・日本語字幕)を同僚から借り、生徒に見せることができた。教科書の内容とも関連する CBS のドキュメンタリーもリスニング教材として使った。いろいろ学んだ最後に「El Sistema とは何か、知らない人にもわかるように英語で説明し、この活動についてどう考えるか述べよ」という課題を出した。語数は100語程度。

(生徒作品例)

El Sistema is a program to teach classical music to Venezuelan citizens including people who live in poverty. Usually, poor people have no hope for their future and not a few of them join gangs and commit crimes. However, El Sistema gave hope to poor citizens and taught many important things for life such as respect and teamwork. In my opinion, music enriches us mentally. Although being poor substantially, people can live a wonderful life if they are mentally rich. Today, many people in the world are substantially and mentally poor, and they're leading a miserable life. To change the situation, programs like El Sistema are necessary.

このような活動をすると、生徒はこれまでのハンドアウトやテキストをもう一度読み直し、良い表現をピックアップして使おうとするので、良い復習になる。また、生徒たちの真摯な感想を読むと、やはり題材選びが何より大事だと思われる。今後も良い教材を探しつつ、研究を続けたい。

2.5 高校1年生(67期)英語表現 I

担当：阪田卓洋

2.5.1 はじめに

英語表現 I は2単位であるが、LL 教室で実施するリスニング中心の授業と、ティームティーチングで行うスピーキング中心の授業に分かれている。ここでは、その両者に共通する英語表現全体の指導について述べる。

1 学期はスピーチの指導に重きを置いた。まずは自分の言いたいことを明確に言えるようにすることが、その後、ディスカッション、ディベート、ネゴシエーションなどの発展的な活動につながると考えたためだ。また、高入生と連絡生が混在するクラスにおいて、クラスメイトの前で発表する機会を設けることは教育的にも大事であると感じた。

2 学期はディスカッションに中心を移した。自分の言いたいことを言うという意味ではスピーチと同じであるが、ディスカッションでは相手を意識して即座に話すことが要求される。また、その流れに反対するのか、賛成するのか、といった会話に入る技術も必要になる。そのため、スピーチよりも負荷のかかる活動であることは間違いないが、逆に言えば、より実際のコミュニケーションに近い活動である。

2.5.2 1 学期

2.5.2.1 LL 教室を使用した授業

LL の授業では世界的に有名なスピーチを題材としてリスニング活動を多く実施した。主な題材を以下に載せる。

- ①Leonardo DiCaprio オスカー受賞スピーチ
- ②Steve Jobs スタンフォード演説
- ③Barack Obama 広島スピーチ
- ④Emma Watson 国連におけるスピーチ
- ⑤David Cameron 辞任スピーチ

トピック選定の際には、文法項目や語彙項目の難易度を意識するよりも、男子高校生の興味関心を引くかどうかを意識した。また、スピーチとして有名で魅力的であっても、教科書などで扱われることの多いものは選ばなかった。新鮮で生徒の関心を引くホットなスピーチを選定するよう心掛けた。

授業の進め方は以下の通りである。

- ①スピーチの視聴
- ②大まかな意味の把握
- ③Dictation (Fill in the blanks)
- ④文法・語法解説

⑤音読練習

⑥録音

まずはスピーチを視聴させ全体の意味を掴ませてから、穴あきのスクリプトを配布し、繰り返し聞きながら全文を理解していく。未習の文法事項等は、理解するのに必要最低限説明をする。理解を終えた後は、スピーチを繰り返し聞きながら、音読練習をする。一語一語の発音はもちろん、イントネーションやストレスを置く位置も真似させるようにした。最後には音読を録音、そして提出させ、成績に反映した。

反省点としては、生徒の録音した音声を全員で共有できなかったことである。録音された音声を聞くと、ストレスの強弱をイントネーションの高低で代用している生徒が多いように感じた。もちろん、ストレスの強弱とイントネーションの高低は関係しているが、母語に「強く読む」という読み方が基本的にない以上、ストレスの強弱を意識した読み方を指導する必要がある。音声を全体に聞かせながら音読指導することを今後の課題としたい。

2.5.2.2 ティームティーチング

最初の数時間は、自己紹介とした。もちろん高入生と連絡生との交流との意味合いもあるが、それと同時に、この学年を初めて担当する筆者にとっては、生徒の英語力を最初に知りたかった。その場で即興で話してもらうスタイルにしたが、英語を話すことに対する抵抗感の低い生徒が多く、むしろ、積極的に話そうとする生徒が多いと感じた。そのため、スピーチの指導はもちろんのこと、生徒が一秒でも多く英語を話すように、様々なスピーキング活動を取り入れるようにした。

自己紹介を終えた後は、5月の宿泊研修で長野を訪ねたことを踏まえて、“Which do you like better, living in the city or living in the countryside?”という題でスピーチを用意させた。スピーチの内容に関しては理由と根拠、具体例を取り入れることを促し、また、発表の仕方についてはALTに随時アドバイスをしてもらった。スピーチだけ一人ずつ続けているは他の生徒が飽きてしまうため、各スピーチのあとに質問の時間を設け、誰でも質問してよいことにした。質問した数は積極的に授業に参加したとみなし、成績に加味した。

スピーチ発表後には、その原稿を利用して150語程度の英作文を課した。スピーチを作成する際に、具体例や根拠の例示なども指示していたため、150語程度でも簡単に書けたようであった。この英作文はALT

と共に採点をし、成績に加味した。

1学期の最後には、パフォーマンス・テストとして、LLの授業で扱った教材の暗唱テストを行った。暗唱する題材は生徒に任せ、完璧にコピーすることを促した。個々の発音のみならず、息遣いやイントネーションをも完全に再現する生徒もいて、大いに盛り上がった。

2.5.3 2学期

2.5.3.1 LL教室を使用した授業

2学期の最初は、夏休み中の課題図書 *The Body* (Penguin Books) の映画版である *Stand by Me* を視聴した。仮定法を導入する時期であったため、映画の会話の中から仮定法が使われている部分を選び、Dictationさせた。題材としては面白かったが、登場人物の発話スピードが早く、リスニングの後に音読まで持っていけなかったことは残念だった。

その後は、映画 *Dead Poets Society* を視聴した。これは、アメリカのエリート男子校を舞台にした映画であるため、本校の生徒にとっては馴染みやすいものである。また、英語の授業の場面では、英米の有名な詩が紹介されるため、英米文学への理解も深めることができる。映画で紹介されている詩の中から、今年以下の詩を扱った。

①Walt Whitman, “O Captain! My Captain!”

②Robert Frost, “The Road Not Taken”

とりわけ②の詩に関しては、劇中で紹介される解釈と、実際に全文を読んだ際の解釈には違いが認められる。その点に注目して詩を注意深く読ませ、一語一句正確に読み解きながら解釈する大切さを指導した。

映画視聴後は、後述するティームティーチングの授業で、この映画についてディスカッションする時間を取った。その後、そのディスカッションをもとに、200語のエッセイを書いてくるよう指示した。holistic評価で10点満点とし、成績に加味する予定である。

映画視聴後には、ニュース英語を扱うことにした。アメリカでは大統領選の真っ只中であるため、ニュースでどのような報道がされているかを紹介しながら、Dictationなどの活動をしていく予定である。

2.5.3.2 ティームティーチング

2学期にはディスカッションを授業の中心に据えるようにした。一つの授業時間の中で、グループでディスカッションする時間を必ず取るようにし、その後、クラス全体で意見を共有できるようにした。

ディスカッションの題材選定には苦心した。トピッ

クが面白くなければ生徒はやる気を失い、ディスカッションの時間に黙り込んでしまう。また、内容が難しすぎて英語では十分に議論することはできない。休み時間に雑談するくらい些細な、それでいてずっと話せるような面白い題材をイメージしながら選定した。以下にそのトピックを示す。

- ① 初めてのデートならどこに行くか
- ② 無人島に住むなら何を持っていくか
- ③ 校長になったら自分の学校の何を変えたいか
- ④ 沈没しそうな船で、乗客の誰を助けるか
- ⑤ 自分が桃太郎なら鬼ヶ島に誰を連れていくか
- ⑥ 1人暮らしするならどの部屋が良いか

これらトピックには選択肢をつけて「どの選択肢を選ぶのが妥当か」という点で議論させた。選択肢をつけずに自由に議論させた時もあったが、ある程度の縛りがないと生徒たちは逆に意見を出しづらいことが分かった。限られた選択肢の中で、どのような組み合わせが最も説得力があるか、という問いを立てる方が本校の生徒には合うようである。それ以降は、自分ならどのような選択肢があれば面白いのか、を常に考えながら授業で提示している。

日本語でディスカッションしてしまわないように、ALT と二人で机間巡視をしている。日本語が聞こえたグループには “What is your opinion?” と一人の生徒を指名しながら介入し、英語の意見が聞こえるまでその場を離れないようにしている。また、自己評価シートを配り、英語で発言した回数を自分でカウントし、記録として残させている。学期の最後の回収し、成績に加味する予定である。ディスカッショングループも毎回変え、メンバー構成による不公平をなくすように努めている。

2 学期の最後には上のトピックから一つを選び、グループでプレゼンテーションをさせる予定である。



ディスカッションの様子

2.6 高校 2 年生 (66 期) コミュニケーション英語Ⅱ (3 単位分) 担当：高橋深美

2.6.1 はじめに

本校のコミュニケーション英語Ⅱは4単位であるが、3単位を教科書類を中心とした学習に当て、1単位をティーム・ティーチングとして他の教員が担当している。

本校で使用している教科書は UNICORN English Communication 2 (文英堂) である。この教科書は12課からなり、それぞれの課が、4~5つのセクション、文法解説、Exercises、Supplementary Reading から成り、他に For Reading が数ページある。授業では教科書のレッスンをいくつか選んで扱うほか、別のリーディング教材の読解、作文、スピーチ等を取り入れている。文法は必要に応じて説明することとどめており、語彙、文法の補強として、付属のワークブックを使用し、各自で取り組むこととしている。

2.6.2 授業での取り組み

筆者は2014年度にもコミュニケーション英語Ⅱの同等分野を担当しており、教材はそのときに使用したものに、新たに改変を加えて使用しているものが多い。筆者が担当している3単位分の授業は2単位分を教科書等に充て、1単位分をリスニングに充てている。

2.6.2.1 1 学期

春休みに Oxford Bookworm 4 の Treasure Island の通読を課題として、主として読んできたかどうかを問う試験を実施した。Treasure Island は有名な作品ではあるが、人が死ぬ場面が多く、また登場人物がほとんど男性であり、その意味では男子校だから課題にできる教材とも言えよう。

教科書については1学期は次の2課を選択して学習した。

L.1 Through the Eyes of Imagination

L.4 International Space Station

L.1 は錯視を取り上げていたので、様々な錯視の例を示し、例えば、これとこれは実は合同である、ということ電子黒板を使って、画像の一部を切り取って並べて見せるなどの工夫をしてみた。

1 学期後半は A.A. Milne の Winnie-the-Pooh の第 6 章と第 8 章を教材として使用した。Winnie-the-Pooh は原文は必ずしも難解ではないが、格調の保たれた英文であり、随所に言葉遊びが散りば

められている。教科書からほのぼのとしたものが消えている現在、内容的にも適した教材であった。

なお、Follow up として、2011年の作品である、映画「くまのプーさん」を使用した。ハンドアウトを作成して、内容理解の手助けをしつつ、英語版で全編を視聴したが、授業後の生徒の感想は「きょうはとてもいい気持ちで家に帰れる」等、大変好評であった。

2.6.2.2 2学期

夏休みには Oxford Bookworm 5 の Ghost Stories の通読を課題にした。これは6話の短編が収められているものだが、総語数は22,000語以上有り、読み終えたことで自信につながった生徒が多かったようである。これについては1学期同様、夏休み明けにテストを行った。

教科書は2学期前半は次の2課を学習した。

L.2 The Problem We All Live With

L.8 Global Water Issues

L.2 はニューオーリンズで初めて Integrated School となった小学校に通う Ruby Bridges の話であり、この登校風景は Norman Rockwell の絵で大変有名である。授業では Norman Rockwell のその他の絵と共に、The Story of Ruby Bridges (絵本) の一部を提示した。

L.8 は世界の「水資源」を巡る問題を論じた英文である。文中には様々は統計に基づく数字が挙げられているが、英語そのものからは少し離れるものの、筆者の論拠として挙げている数字はそのような統計を取ると可能なのか、論理の展開に無理がないか critical に読み進めることが可能であった。

2学期後半は、2014年度と同様に The Diary of Anne Frank の一部を抜粋して学習する予定である。アンネの日記はよく知られた作品であるが、約20年前にそれ以前の版では省略されていた個所を補填した完全版が出版されており、その英語版を読解教材として用いることとする。2014年度は「この部分を読ませるなら、是非こども」というに授業者の思いが先走り、教材が多くなってしまったが、今回は1回ごとに無理なく完結するように、提示する教材の量を絞ろうと考えている。

2.6.3 ライティングについて

教科書を使用する授業では、どうしても「話す」「書く」作業が少なめになる。書く作業については少し時間を取って、パラグラフライティングの基礎を指導し

た。内容は「説明文」と「情景描写」であるが、内容を一定の語数レンジに収め、バランスよく書くことを主眼にした。今のところ peer evaluation などには発展させていないが、今後互いに読み合う活動を取り入れたり、ショートスピーチの原稿とするなどの発展形態を検討している。

2.6.4 リスニングについて

授業ではアメリカを旅行している男女が、ある犯罪事件に巻き込まれ、ストーリーが展開していく教材を使用している。やや古い教材で、公衆電話や FAX の時代のものであるが、会話そのものは臨場感があり、レストラン、観光、医院、ホテル等の会話も網羅されているほか、ストーリーも次が聞きたくなるところで終わるように工夫されており、生徒も興味を持って学習しているようである。

2.6.5 今後の課題

4技能の伸長が英語科の科目の目指すところであるが、この科目の1単位分(ティームティーチング)を担当している教員と連携を取りながら、バランスのとれた技能の伸長を心がけていきたいと考えている。

2.7 高校2年生(66期) コミュニケーション英語Ⅱ (1単位分) 担当: 須田智之

2.7.1 はじめに

高校2年生(66期生)のコミュニケーション英語Ⅱ(4単位)中の1単位で、ALT とのティーム・ティーチング(以下 TT)により、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションやディベート等、主にスピーキング力の向上を図るとするのがその目標である。今年度は特に、即興型英語ディベートを活動の中心に据えて授業を展開している。

筆者は、昨年度も含めて過去3回程この授業を担当しことがあるが、英語ディベートの指導に関しては全く経験がなかった為、準備型英語ディベートの全国大会を参観しに行ったり、帰国子女や社会人向けの英語クラスでの即興型ディベート等に参加したりするなど、指導に際して様々な試行錯誤を重ねてきた。特に、転機となったのは、2015年の夏に本校の秋元教諭に紹介して頂いた一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)の講習会に参加したことである。その後、自らも英語ディベート体験を重ねることによ

って、その指導に自信が持てるようになってきたと実感している。

2.7.2 1学期の授業

1学期の授業では、即興型英語ディベートに慣れ親しむことを目標とした。本校の授業で採用しているのは、大阪府立大学の中川智皓助教（一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)代表）考案の50分授業で1ラウンド完結可能なフォーマットである。英語ディベートを行う際の役割やルール、試合の流れなどについては、彼女の著書である『授業でできる即興型英語ディベート』を参考にされたい。実際の授業では本書を活用させて頂いたので、改めてここに中川氏への感謝の意を表す。

筆者は本授業で担当する66期生の中学校時代の担任団であり、昨年度は授業担当者として、コミュニケーション英語I(3単位)を担当しており、3学期の授業で、即興型英語ディベートの導入（各スピーカーの役割と対戦の流れの説明、モデルディベートと対戦練習）は実施済みであった。

授業では、生徒同士の対戦(ラウンド)を4回程実施した。生徒は座席ごとのブロックで6人1班とし、その中で肯定側3人、否定側3人の2チームを作る。論題(モーション)について、それぞれのチームで約20分の準備時間の後、別会場にて対戦を実施している。各ラウンドの論題は以下の通りである。

- Celebrities who got accused of drug scandals should not be allowed to be back on mass media.
- Using a selfie stick in public space should be banned.
- We should introduce eco-tax.
- We should outsource directing and coaching positions for club activities.

論題は本校が前出の一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会(PDA)の学校会員になっている為、月に1~2つの題材が単語シートともに送られてくるものを主に使用している。対戦に際しては、1班6名に審判(ジャッジ)と司会(チェアパーソン)を担当させた。

1学期の評価は、学期最後にパフォーマンス・テストの形で実施した。内容としては、関西地域研究の直後であった為、京都市のウェブサイト中の英文挨拶を

参考に、関西の魅力を誰か(例:お寺の住職やホテルの支配人等)に成り切ってアピールする挨拶文を作成させるとともに、その挨拶文のスピーチを評価の対象とした。

1学期末にアンケートを実施し、英語ディベートに対する生徒達の意識を調査したところ、多くの生徒達がプレゼンテーション能力の伸長・英語ディベートの将来的な有用性を実感していることなどが分かった。

2.7.3 2学期の授業

2学期も引き続き、即興型英語ディベートを中心に授業を実施している。各ラウンドの論題例は以下の通りである。

- “Pokemon Go” brings more benefit than harm.
- Using normal housing as hotels brings more benefit than harm.
- Driverless cars bring more benefit than harm.

2学期は特に、インプットの増強を図る為、事前に論題と関係のある新聞記事や映像などを使用するように心掛けた。また、2学期の後半はディベート対戦をパフォーマンス・テストとして評価する予定であるが、その際に各自のスピーチをアウトプットそとして提出させることにしたい。

また、2学期は文化祭直前ともなると、生徒達も疲労困憊の色が濃くなる時期がある。そういった時期に無理をしないようにという訳ではないが、デンゼル・ワシントン主演の映画『グレート・ディベーター栄光の教室』を見せることにしている。物語は実話に基づいて黒人の大学ディベート・チームの活躍を描いている。人種差別描写で非常にショッキングな場面もあるが、最後のハーバード大学との対戦場面は非常に印象に残り、ことばの力を実感できる映画であると思う。

2.7.4 3学期の授業

3学期は入試などもあり授業の回数が極端に少ない為、授業計画にも工夫が必要である。英語ディベートの他、英語俳句等のCreative Writingに取り組みせるとともにDead Poets Society in *Tsukukoma*と題して、自作や自分の好きな詩や文学作品等についてのプレゼンテーションを学期末に実施すると共に、原稿を冊子にまとめる予定である。

なお、年間を通しての授業実践の詳細については個人研究にも記載するので、そちらも参照されたい。

2.8 高校3年生(65期) コミュニケーション英語Ⅲ 担当: 八宮 孝夫

2.8.1 はじめに

学習指導要領のコミュニケーション英語Ⅲ(以下、Com 英語Ⅲ)の「目標」や「内容」を見てみると、それ独自の目標があるというより「Com 英語Ⅱの学習を踏まえ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝える能力をさらに伸ばし、実際の社会生活において活用できる英語の能力を身に付けられるよう設定」されたもの、とある。

昨年のCom 英語Ⅱまでは、あるテーマをセクションに分け、4、5時間かけて扱う、というやり方をしてきた。しかし、Com 英語Ⅲはもう少し長めで内容的にも深みのある英文を1、2時間で扱うことを目標とした。

様々なテーマの英文に対応できるよう、ほぼ毎回読み切りで、文化や社会問題、科学的な読み物から文学的なものまで、なるべくバリエーションを持たせ、英文によって非常にシリアスな硬い調子のものから、軽い皮肉交じりのものまで、いろいろと扱うことにした。

2.8.2 1学期の実践

はじめのうちは500語前後の英文を扱うようにした。比較的短い入試問題、小説の冒頭部分、英字新聞のコラム、英文雑誌の記事などを使用。入試問題を使用する場合でも、設問をそのまま使うことはなるべく避け、読み取りの力がつく設問を加えたり、記号選択問題を別の問題に改変したりした。週3時間の授業を、概ね以下の3つに分けるようにした。

2.8.2.1 400語から900語程度の英文を精読する

指示代名詞や名詞構文で示された内容、文章全体の構造など考えて文意をとる。過去の入試問題、*Science* や *Nature* の Editorial や *The Economist*, *The New York Times Magazine* の記事など。

2.8.2.2 リスニングとして導入し、速読する

『大人のための英語教科書』を使用。大学生が4分程度で読める英文を12編収録してあるもので、内容的に高校上級生の知的好奇心を満たすものが多い(例えば、Placebo Effect)。アメリカ英語・イギリス英語両方の発音で朗読してあるCD付きなので、同じ内容をバリエーションのある発音で聞くことができる。リスニング教材として概要をとらせた後で、スクリプト

を配布し速読教材とする(ただし、筆者はあまり「速読」に価値を見出さない。内容の濃い英文はじっくり考えて読むべきだし、文学作品も速読の対象ではない)。また、NHK ラジオ『攻略! 英語リスニング』も有益な教材で、生徒にも聞くことを勧めている。

2.8.2.3 1000語以上の比較的分量の多い英文の概要をつかむ

かつて東大の教養課程のテキストであった *The Universe of English*, *The Universe of English II*, *The Expanding Universe of English II* などの英文や短編など、注釈を頼りに概要をつかみ内容を味わう

(1学期は Fredric Brown の Knock という作品や Patrick McGrath の O'Malley and Schwartz を読ませた)。

Com 英語Ⅱまでは、Oral Introduction をし、ある程度新語の導入をしたり、概要をつかませてから英文を読ませたのだが、今回は independent reader として、自らが初見の英文を理解させる力をつけなければならない。そのための心得として以下のことを強調した:

- 1) 冒頭の部分が大切、慎重に読むこと。
→すべてはここから始まる。何がテーマなのか、登場人物は誰なのか、などじっくり読み進めることが大切。
- 2) 冒頭をすべてわかろうとせず、じきにわかるはずだと思って読み進める勇気も大切である。
→冒頭は大切であるが、そこではあえてはつきりわからないような書き方をしている場合も少なくない。それに続く具体例との関連性を考えること。
- 3) 英文は単独で存在しない。重要なことは表現を変えて繰り返し述べられることが多い。

以上のことは、英文理解のためにはだれでもいうことであり、目新しいものではないが、筆者は特に談話的なつながりに関心があるので、時々適した英文があると、全体の構造を示して、どことどこが言い換えになっているかなど、具体的に示すようにしている。

なお、基本的に予習は課さず、その場で配布した英文を20~30分で読ませ、残りの時間で理解を確認する、という形式である。2.8.2.3に属するものは50分間フルに読ませ、次の時間に理解度を確認した場合もある。

2.8.3 発表活動としての実践例

Com 英語Ⅲは、単にリーディングの授業ではないので、読ませたものをベースにして、その要約を書かせたり、意見・感想を書かせたりする活動を行った。

以下は、上にあげた Patrick McGrath の O'Malley and Schwartz のサマリーの例である：

I will arrange this story in time series [sequence?]. O'Malley was a famous violin player. He met Eurydice Schwartz and became engaged to her. However, she was badly injured by a crocodile [in the zoo] and died. He was deeply sad and became psychotic.

One day, O'Malley played the violin at the platform and many people listened, but he suddenly stopped. He assumed that a woman at the opposite side was Eurydice Schwartz. He went over the rail like in a trance, and tried to kiss the woman. He was soon arrested and taken away by the cops.

After a few days, he was suddenly attacked by members of a radical Canadian environmentalist cult and died. His head somehow ended up in the Reservoir and cried the name "Eurydice Schwartz." In Greek mythology, Orpheus was a great harp player and his wife was bitten by a snake and died. He himself was killed by mad women and his head sang a song, flowing down a river. This peculiarity is similar to "O'Malley and Schwartz." (3-4 Y)

この生徒の指摘の通り、この作品は「オルフェウスとエウリディケ」というギリシャ神話のパロディであり、ゴシック的な少々不気味な短編である。

2.8.4 学期末のパフォーマンス・テストについて

筆者は中学1年から高校2年に至るまで学期末には「パフォーマンス・テスト」と称する英語発表を生徒に課してきた。その学期に扱った題材について、自分で調べたりうんちくを傾けて2分間のスピーチを行うのである。1学期は、Edwin Reischauer という1960年代の駐米大使についても扱った。それに関するスピーチを例として挙げる：

I was deeply impressed by two expressions in this essay. The one is "the two countries seemed to be viewing each other across the Pacific through the same set of binoculars, but looking through from opposite ends." Now, Japan still has much less military power than America, but America became

[came] to ask Japan much more military help than it was when Reischauer wrote this essay, I think.

The other is "put up or shut up." In this case, Reischauer seems to use this phrase in order to express the situation where he had to accept the offer from President Kennedy. I think that Reischauer thought that if he refused the offer, all his books, articles and speeches would be less persuasive. So I think Reischauer was a writer rather than a diplomat or a politician, even after he became an ambassador. I think what was important for him was his pride as a writer as well as his love for both America and Japan. (3-2, N)

この生徒は Reischauer を writer としているが scholar というつもりで使用しているのではないかと思う。そうであるとしたら、まさに彼の言う通りの人物であった。

このような形で、ただ意見を書くだけでなく前で発表することでスピーキング能力の向上にもつながる。

2.8.5 2学期の実践

2学期も基本的には、1学期と同様、日ごとに内容の異なるパッセージを扱い、読解を中心に行った。ただし分量としては1学期よりも長めな物を心掛けた。中には3回ほどに分けて扱った教材もある。"Why do we laugh?" という教材は *The Expanding Universe of English II* の初めの課で、これはいわば大学2年の初めのレベルといえる。冒頭で、英語のジョーク2例を取り上げ、なぜこれらが面白いのか、「笑い」のメカニズムを考察し、最後には「笑い」が本来的に持つ意味・機能に触れている。

もう1つ、4回ほどに分けて扱ったのは Martin Luther King Jr. の "I Have a Dream" speech である。中学3年の時、いちばん有名な I have a dream ... で畳みかける後半の部分は、教科書にも出てきた関係で読み暗唱した部分である(駒場論集53集を参照)。高3では全文を扱い、印象に残った部分を1分間暗唱してスピーチする、という課題を出した。実は、高3でこの課題を出したのは2度目である。筆者は "I Have a Dream" speech を聞いて面白い、部分的に暗唱することを高校英語のまとめとすることを目標に置いてきた。このスピーチには、「米国独立宣言」やリンカンの「ゲティスバーグ・アドレス」を踏まえている部分が見られる。そのために、高1では Thomas Jefferson & The Declaration of Independence という自主教材を

作り、有名な部分は暗唱させ、高 2 では Lincoln's Gettysburg Address として、やはり全文を解説し、ほぼ全体を暗唱させた。こういういわば下地を作ることで、キング牧師の全文を見たときに、この 2 つの歴史的英文との関連性が、こちらが解説を加えなくても見て取れるはずなのである。キングのこのスピーチは、そうでなくても地名や聖書の引用など補足説明すべきところがたくさんある。その説明があまりに多いと、せっかくの名文でも理解する前にあきらめてしまいかねない。逆に、このスピーチの根底にある独立宣言やリンカンの演説の精神を説明抜きに感じ取れば、そのエッセンスをつかむことはできるのである。

1 つ例を示そう。冒頭で “I am happy to join with you today ...” と参加者とこのワシントン大行進に集えたことを喜んだ後で “Five score years ago, a great American, in whose symbolic shadow we stand today, signed the Emancipation Proclamation.” と続ける。この “Five score” はリンカンの “Four score and seven years ago” というゲティスバーグ演説の冒頭を踏まえているのである。したがって、すぐにリンカンとの関係に思い至り、five score(=20) →100、1963 年の 100 年前→1863 年、奴隷解放宣言発布となり a great American と Emancipation Proclamation の関係も一瞬にして了解するのである。

補足説明として加えるものは、繰り返し畳みかけるフレーズ、比喩と対句の豊富さである。例えば、これも冒頭近くで、“One hundred years later, the Negro lives on a lonely island of poverty in the midst of a vast ocean of material prosperity.” という文がある。One hundred years later というフレーズは 4 度繰り返される。「リンカンの奴隷解放宣言から 100 年もたっているのに」という強調の効果がある。また、a lonely island of poverty は貧困状態を「孤島」に例えると同時に、その後の a vast ocean of material prosperity とは非常にクリアな対比、対句表現となっている。このような鮮明な比喩や対句があるために、聞いて理解したり、暗唱したりするにはかえって容易なのである。

キングのスピーチはまた音声的な特徴もあり、いわゆるピリオドで文を切るのではなく、次の文の最初のフレーズくらいまで、畳みかけることがよくある。内容の理解とともに音声上の特徴もつかませたい。

具体的な進め方としては、冒頭の部分、中盤の部分、最後の有名な部分と 3 つに分けて、キーフレーズ的な部分をブランクにして、聞きながら穴埋めをし、その

確認をしながら補足説明、音声の特徴などを指摘させた。その際役立つものとして、『キング牧師とアメリカの夢』、*The Autobiography of Martin Luther King Jr.* また、若林俊輔氏による音声解説（『現代英語教育』1995 年 10 月号）がある。最近では『I Have a Dream 生声で聴け！世界を変えたキング牧師のスピーチ』も CD 付きでよい。また、you-tube にも映像があるので、全体の内容理解ができたならまとめとして見せると、リンカン記念堂やワシントン・モニュメントなど位置関係がわかってよい。

評価としては、学期の最後の 2 時間で、印象に残った 1 分間を暗唱発表させた。また、期末考査に内容理解の読解問題も出した。

受験を前にして、暗唱のパフォーマンス・テストにどれだけ真剣に取り組んでくれるか心配な面もあったが、予想よりもはるかに準備をしていた印象である。期末考査の最後に、3 年間の英語の授業について感想を書かせたところ、スピーチの暗唱は最初負担であったが、次第にその価値が分かったという風にとらえた生徒が多かった。代表的なものをあげる。

About three years ago, I hesitated to speak English in public and I was so nervous that my hands shook heavily. But I gradually got used to doing so, at the last class, I didn't feel nervous. Obviously, this is because of Mr. Hachimiyama's class. What you taught us is not only the English overall skills but also the way of good speech. We can never be satisfied without your great class. I want to express my gratitude. Thank you very much for your class. (3-1, M)

テストの一環で書かせたので、多分にお世辞はあるにしても、人前で話す訓練は肯定的にとらえている。

2.8.6 おわりに

パフォーマンス・テストの例が示すように、授業で扱った教材を踏まえて、それに関するうんちくや調べたことを発表することは生きたコミュニケーション活動になりうる。日々の授業時間に、毎回それができるわけではないが、大学受験を前にして、ただ英文を読んで訳し、という活動よりはるかに多角的に英語の能力を高めることができると考える。

【参考文献】

1. Carson, Clayborne *The Autobiography of Martin Luther King Jr.* (1999) Abacus

2. Patrick McGrath, *O'Malley and Schwartz* (*The Universe of English II* に所収)
3. Reischauer, Edwin O. (1986) *My Life between Japan and America, Weatherhill*
4. 柴原智幸 『攻略！英語リスニング』NHK 出版
5. 新川右好・森山淑夫編 『キング牧師とアメリカの夢』(1984) 三友社
6. 東京大学教養学部英語教室編 (1993) *The Universe of English* 東京大学出版会
7. 東京大学教養学部英語教室編 (1998) *The Universe of English II* 東京大学出版会
8. 東京大学教養学部英語教室編 (2000) *The Expanding Universe of English II* 東京大学出版会
9. 筑波大学駒場論集 53 集 (2013)
10. 山久瀬洋二 (翻訳・解説) 『I Have a Dream 生声で聴け！世界を変えたキング牧師のスピーチ』(2013) (IBC パブリッシング)
11. 山本史郎、ブレンダン・ウィルソン (2008) 『大人のための英語教科書』 IBC パブリッシング
12. 若林俊輔「スピーチ I Have a Dream の魅力」(『現代英語教育』1995 年 10 月号所収)

2.9 高校 3 年生 (65 期) 英語表現 II

担当：秋元佐恵、阪田卓洋

2.9.1 ライティング授業の概要

2 単位のうち、1 時間を自由英作文 (パラグラフライティング) の指導、もう 1 時間を文法の確認と和文英訳にあてている。採択教科書は主に生徒の自宅学習用にあて、授業はすべて教員作成のハンドアウトを使って進められる。

2.9.2 パラグラフライティングのトピック

担当：秋元佐恵

指導方法は以下の通りである。

- ① あるトピックについて読み (聴き)、表現に必要な背景知識や語彙、便利な表現などを学ぶ。
- ② 課題の提示。通常 100 語～200 語で書く。各自提出。
- ③ 翌週、添削・採点して返却。採点基準、満点作品、文法の注意点をプリントにしてフィードバック。

●主なトピック一覧

【物語文】

- ・音楽は自分にとってどんな意味をもつか述べてよ。
- ・ピーターラビットの話をもとめて続きを考えよ。

【説明文】

- ・日本の人口推移グラフの分析せよ。
- ・日本のことわざを使用場面とともに説明せよ。

【描写文】

- ・学校の場所や人を選んで描写せよ。
→『筑駒辞典』に編纂。
- ・日本文化を代表する人を 1 人選んで描写せよ。
- ・4 コマ漫画の内容を描写せよ。

【意見文】

- ・国立文系学部改編について意見を述べよ。
- ・特別考査の是非を述べよ。
- ・自分が英語教師ならいかに英語を教えるか述べてよ。
- ・自分で論題を 1 つ決め、ポイント 2 つを挙げて説得力あるスピーチ原稿を作成せよ。

【創作】

- ・英語ジョークの考案。
- ・映画の宣伝文作成。

毎回受講者全員分のエッセイを添削するのは労力のいる作業である。しかし、自由英作文上達には、実際に書いて、戻ってきた添削を見て、さらに模範と比べて自ら改善する、という方法が最も良いと思われるので、この方法でやっている。またこちら側としても、深い内容の作文に出会って感激したり、示唆に富む内容の作文に刺激を受け、次の授業案が浮かぶこともある。今後も良いトピックを考えて、生徒の英語力を鍛えてゆきたい。

なお、2 学期最後の時間に、筑駒を紹介する『筑駒辞典』をまとめ、配布した。

2.9.3 和文英訳・文法演習 担当：阪田卓洋

この授業では和文英訳・文法演習を中心に扱った。授業の進め方を以下に示す。

- ① 文法・語法の確認問題 (選択肢。20 問程度)
- ② 前回の提出課題返却と feedback
- ③ 今回の文法事項の確認 (問題演習。和文英訳)
- ④ 英字新聞からの抜粋を和文英訳
- ⑤ 提出課題の配布、提出

最初はウォーミングアップとして文法・語法の選択肢問題を解いてもらい、答え合わせをした。文法的な部分の選択肢問題はほぼ簡単に解けてしまうため、口語表現などの語法問題を中心に扱った。

その後は、前回の提出課題を返し、共通している誤

りを解説した。毎回、授業の終わりに3文程度の和文英訳を課している。大学入試問題を使うことが多い。

そこから本時の学習として一つの文法項目を紹介する。3年生ともなると大体の文法は正確に使えているが、やはり過去完了形や仮定法などは不正確な知識のまま英作文に使っている生徒も多い。例文を示しながら、和文英訳の問題を解いてもらい、正確な使い方を伝える。過去完了形を教える際には、文学作品の冒頭部分をコピーし、動詞の部分だけ黒塗りをして、過去形と過去完了形のどちらを選ぶかをやらせてみた。時間軸を意識出来ない生徒には難しい課題だったようである。時間軸を意識して英語を読めるようになれば、英作文の際にも適切な時制・相を選ぶことができると思われる。

その後は英字新聞の抜粋から和文英訳の問題を2題程度解いてもらう。仮定法、無生物主語など生徒たちが苦戦しそうだと思われる箇所を選び、英訳させる。ここで英訳させた一人一人の解答を個別にチェックすることはできないため、模範解答と解説を載せたプリントを配布し各自に答え合わせをさせ、質問を個別に受け付けるようにしている。

授業の最後には、提出課題を配布し授業時間内に完成させ、提出させる。毎回120名程度の英作文を添削するのには根気があるが、生徒たちに共通している誤用を毎回のように発見でき、それを指導に生かしている。例えば、「多くの学校や会社の始まる時間は変わっていない。」という文を英訳する際に、

The starting time of many schools and offices do not change.

とする生徒が意外と多い。日本語には表面的に表れない完了形のニュアンスを汲み取るトレーニングが必要であると痛感した。今後も添削を繰り返しながら適切な指導をしていきたい。

【参考文献】

1. 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社
2. 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 金子書房
3. 久野暲、高見健一 (2005) 『謎解きの英文法 文意味』 くろしお出版
4. 久野暲、高見健一 (2013) 『謎解きの英文法 時の表現』 くろしお出版
5. 竹岡広信 (2015) 『必携英語表現集』 CHART INSTITUTE
6. 竹岡広信 (2011) 『入試必携英作文』 数研出版株式会社

7. 長原幸雄 (1990) 『関係節』 大修館書店
8. Leech, G.N. (1987) *Meaning and the English Verb*, Longman.
9. Quirk et. al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

3. 総合学習での取り組み

3.1 概要

本校では総合学習の一環として、中学3年生「テーマ学習」、高校2年生「課題研究」が設けられ、普段の授業では扱えないような専門的内容を深める学習を、土曜日に行っている。各教科がテーマと担当者を出し、生徒は1つを選択する。1講座の人数は10~20名程度である。

英語科は、SSH重点目標「グローバルサイエンティストの育成」を意識し、日本学術振興会(JSPS)提供のプログラム『サイエンス・ダイアログ』を利用し、「国際社会において、受容・発信する能力の育成」に努めている。

(詳細は <http://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/> を参照)

3.2 中学3年生(68期)テーマ学習

講座名「Science Dialogue Jr.」で、3つの目標(1)海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語での講演を聞き、質疑応答などでコミュニケーションを図る(2)彼らのプレゼン技術を学ぶ(3)自分の研究を英語で発表するを掲げている。内容は専門的で、英語での理解が易しいとは限らないが、簡単な実験や映像等を併用した上手なプレゼンにより、大体の内容は理解できているようである。生徒には、毎回(講演者は異なる)講師に1人1つは質問をすること、アンケートのコメント欄に講師へのメッセージを英語で書くことを義務づけている。



現在、1月に行う自分たちの発表へ向けて、テーマの選択と abstract 作りに入っており、まずは月末に、お互いの発表について知ることで、モチベーションを高めて行きたいと考えている。

3.3 高校2年生(66期) 課題研究

高2 課題研究では、『サイエンス・ダイアログ』を利用し、海外の若手研究者から自国の文化や専門分野についてプレゼンテーションを聞いている。発表内容だけではなく、発表の仕方にも注目し、学術的な内容をわかりやすく伝えるプレゼンテーションを習得できるようにしている。

サイエンス・ダイアログと並行して、生徒一人一人が自身のテーマを設定し、研究して発表する機会を年度末に設けている。今はまだリサーチをまとめている段階であるが、興味深いテーマが多い。以下にその例を示す。

- 地球に穴を掘り、そこに物を落とすことを輸送手段として考えられないか
- トスジャグリングの数学的記述
- ライトノベルの歴史
- 睡眠時間をコントロールできるのか

1月の発表に向けて、今後は分かりやすいプレゼンテーションの指導をしていく予定である。

4. 国際交流

4.1 概要

本校はスーパーサイエンスハイスクール (SSH) として、海外の高校などとの研究交流実績を上げてきた。また 23 年度より筑波大学はその附属学校に対して、「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会は確実に増えている。

以下に、2016年度の国際交流活動(予定を含む)を挙げ、いくつかについて説明する。

<SSH 関係>

- (1) 台湾台中高級第一中学訪問
- (2) 立命館高校 SSH プログラム・北京研修
- (3) 横浜サイエンスフロンティア高校(YSF) SSH プログラム・米国トマスジェファーソン高校訪問
- (4) 釜山国際高校・KSA (韓国科学アカデミー) 訪問
- (5) 日本学術振興会による Science Dialogue 参加
- (6) イングリッシュ・ルーム

4.2 韓国・釜山国際高校との交流

筑波大学の「附属学校のグローバル化に資する事業」における「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」予算により、2013年に相互交流が実現した。

2016年1月26日に先方生徒20名、引率教員3名が来校した。釜山国際高校の生徒は本校生徒(バディ)とともに、日本民芸館→東京大学駒場→本校の順で回り、交流をした。

その後、2016年3月27日～31日に、本校生徒12名、引率教員3名で韓国・釜山を訪問した。期間中は釜山国際高校での交流(文化研究発表を含む)や韓国科学アカデミー(理系に特化した高校)への訪問や、釜山・慶州での見学・フィールドワークを実施した。



4.3 プレゼンテーション・ワークショップ

昨年度に引き続き、Vierheller 夫妻を招き、プレゼンテーション・スキルを学ぶワークショップを1学期期末試験後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には主に中3・高1の生徒約20名が参加し、グループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるさまざまなスキル、具体的にはスピーチの声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについてであった。2学年から成る各グループは協力して原稿を作り、発表をしながらその都度指導を受けた。

異なる学年での交わりや話し方に関するアドバイスなど、普段の授業では経験できない取り組みであると言える。なお、3学期には昨年同様、中1・中2対象の「ビギナーズ用ワークショップ」も開催予定である。



4.4 イングリッシュ・ルーム

イングリッシュ・ルームは、東京大学の大学院留学生に依頼し、通常は月に2～3回の平日放課後1時間半程度で、その日に来た生徒に合わせて相手をしてもらっている。また、中3テーマ学習・高2課題研究の「サイエンス・ダイアログ」では生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導にも活用している。

